

近代文学研究叢書

第 八 卷

昭和女子大学

近代文学研究室

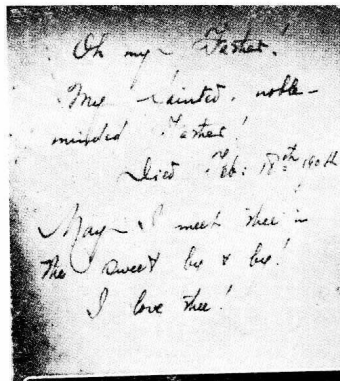
監

修

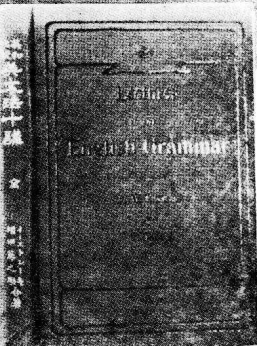
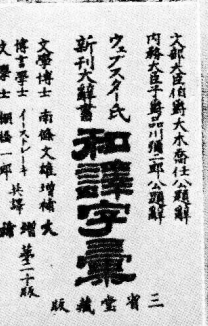
笹澤美明	佐々木八郎	坂本由五郎	木俣修	河鱸實英	金子健二	片桐顯智	荻原井泉水	太田三郎	上井磯吉	石森延男	池田龜鑑
(独文学)	(国文学)	(英文学)	(和歌文学)	(歴史学)	(英文学)	(和歌文学)	(俳文学)	(比較文学)	(英語学)	(児童文学)	(国文学)
吉田澄夫	本間久雄	細川清	保坂都	人見圓吉	成瀬正勝	内藤濯	辻村鑑	玉井幸助	島田謹二	山宮允	佐藤幹二
(国語学)	(近代文学)	(劇文学)	(国文学)	(近代文学)	(近代文学)	(仏文学)	(英文学)	(国文学)	(比較文学)	(英文学)	(国文学)

イーストレキ

イーストレキの肖像とその裏に書いた三女の亡き父への愛慕の言葉。「1904年2月18日死」と記してあるのは1905年の思いちがいであると筆者が確認している。(中久木ベリル氏蔵)



「ヒロイック・ジャパン」の表紙（明治二十九年九月刊（上野図書館蔵））



イーストレキと増田藤之助共著の「英文法十講」――明治四十三年刊（昭和女子大学蔵）

イーストレーキと太田ナヲミとの結婚証明書——一八八八年六月六日附
(中久木マヨリル氏蔵)

イーストレキと棚橋一郎共訳のウェブスター辞典第二十
版の扉と背表紙—明治二十六年二月刊（昭和女子大学蔵）

田 口 卯 吉

卯吉の書（次男武次郎が小學生の頃の同
 覧雑誌に寄せたもの）（田口親氏蔵）

卯吉の肖像 「時勢論」明治十六年一月刊（田口親氏蔵）

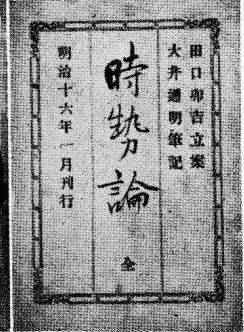


勿謂今日不學
 有明日勿謂今
 年不學有明年
 日月去矣歲年
 我不延嗚呼老
 矣是誰過乎
 鼎軒書

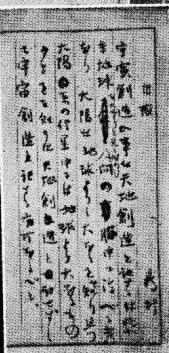
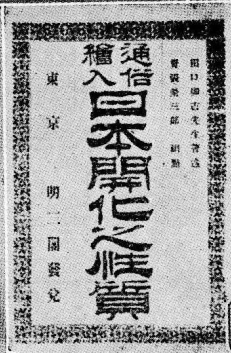
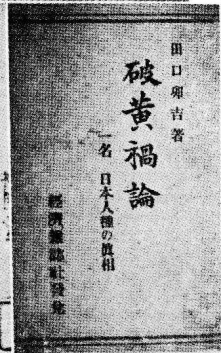


「支那開化小史」明治二十一年二月刊

（田口文太氏蔵）



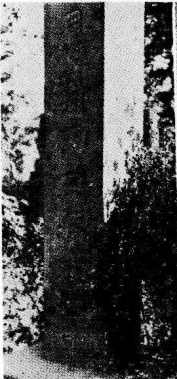
南嶋巡航記—明治二十六年三月刊
 卯吉が叙を書いている
 （田口武二郎氏蔵）



（自戒）卯吉の覚書

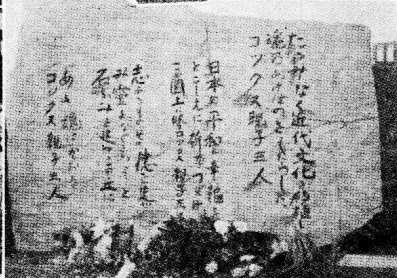
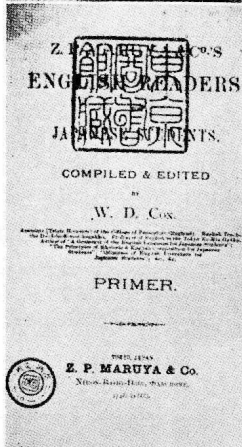
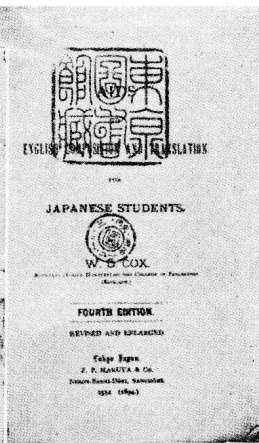
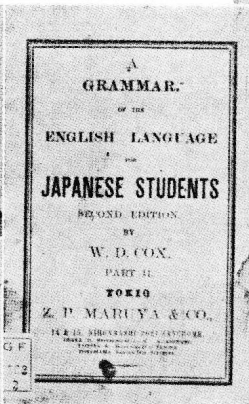
日本開化之性質—明治十九年
 十二月刊（昭和女子大学蔵）

「破黃禍論」—明治三十七
 年六月刊（田口親氏蔵）



卯吉の墓（東京都谷中墓地）

“A Grammar of the English Language for Japanese Students”
—1881年刊（上野図書館蔵）



コックス慰霊碑除幕式―昭和三十三年十二月八日―当日の光景、中央に立っているのは英国文化振興会副会長リビングストン氏

コックス慰霊碑―東京都八王子市外
御殿山所在。これは表面で、裏面に
はコックス親子三人の名前と一九五
七、一、二、八昭和女子大学近代文学
研究室と刻んである。

“English Readers for Japanese Students”——一八八八年刊（上野図書館蔵）

第一高等學校大學予科文科卒業記念写真―明治三十六年七月。前列向つて右から三人目がコックス第二列左から八人が桑木巖賀第四列左から二人目が辻村靈氏

岸田吟香

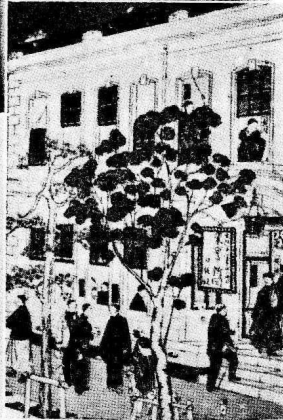
「もしほ草」第三編の表紙
(昭和女子大学蔵)

「もしほ草」第二編の表紙
(昭和女子大学蔵)

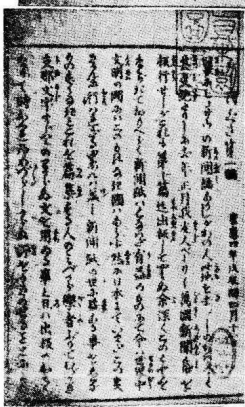
「もしほ草」第一編の初頁―慶応四年四月刊



吟香肖像



東京第貳名所銀座通煉瓦石之図と題する錦絵に描かれた吟香、右手の「東京日々新聞」と記した大看板の下に立っているのが吟香



衣垢不洩 器毀不補 對
人猶有憐色 行垢不洩
德缺不補 對天竺無
愧心 寄仲秋吟香



「海外新聞」の表紙(左)と初頁
(右)―元治二年刊(勝俣銓吉郎氏蔵)



東京都江東区向島の水神社境内にある吟香記念碑

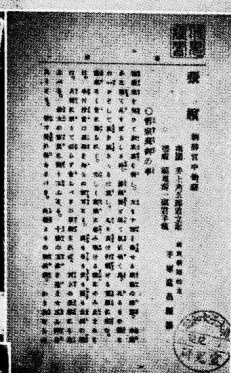
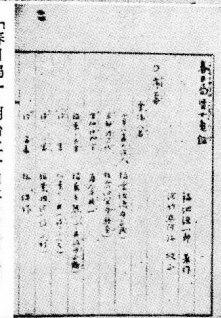
福地櫻痴

塚原蒔柿園と共訳の「昆太郎物語」——明治二十八年八月刊（昭和女子大学蔵）

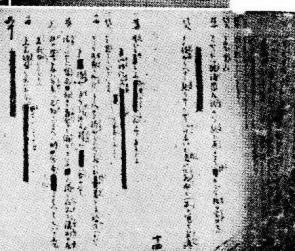
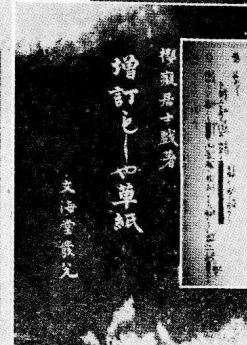


「張嬪」（発売禁止となった小説）——明治二十七年十二月刊。下はその初頁（昭和女子大学蔵）
 櫻痴肖像
 「新作夜の鶴」第三幕草稿の一部（本間久雄氏蔵）！

「春日局」——明治二十四年五月刊（昭和女子大学蔵）
 「春日局賢女伝説」（春日局の初稿）
 自筆稿本



「会社辨」——明治四年刊
 （昭和女子大学蔵）



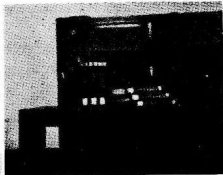
「もしや草紙」（諷刺小説の代表作）
 明治二十一年十一月刊（昭和女子大学蔵）

黒川眞頼

眞頼肖像



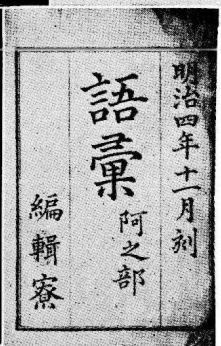
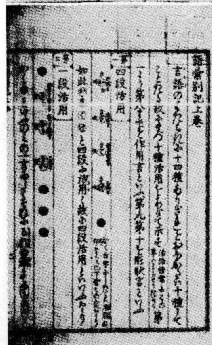
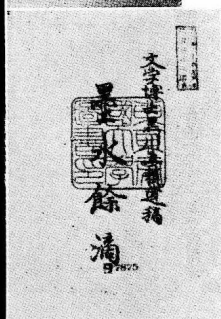
黒川眞頼全集と眞頼遺愛の机
(昭和女子大学蔵)



「明治横文字百人一首」の表紙(黒川直武氏蔵)



「明治現存三十六歌撰」——明治十年六月刊
(昭和女子大学蔵)

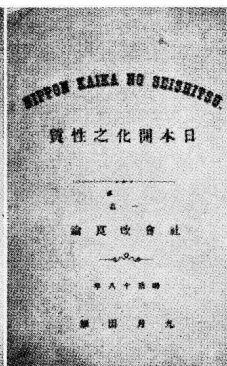
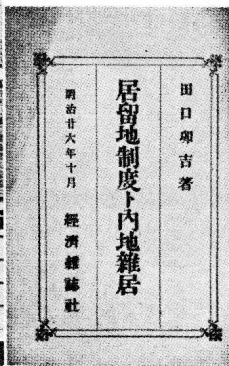


「墨水余滴」——明治四十一年七月刊
(東京大学図書館蔵)

「語彙」(全十三冊)——明治四年十一月刊
右から巻一扉、巻二、巻三表紙、語彙別記上
巻初頁(上野図書館蔵)

吉 卯 と 癡 櫻

「居留地制度」内地雜居（卯吉）—明治二十六年十月刊（田口親氏蔵）



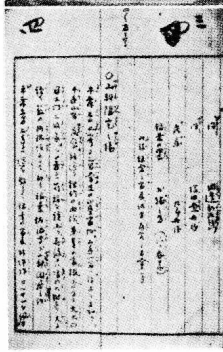
「日本開化之性質」（卯吉）—明治十八年九月刊（田口親氏蔵）下は同上明治十九年十二月刊



卯吉邸窓先における長男文太氏（前列右）と上田敏（後列右、卯吉邸に書生として寄寓當時）



中根淑から指導をうけた卯吉の漢詩原稿（田口文太氏蔵）



「春日局賢女亀鑑」自筆稿本（櫻痴）（上野國書館蔵）



「日蓮記」（櫻痴）の挿絵—明治二十七年五月刊（昭和女子大学蔵）
「色慾二筋道」（色と慾改題，櫻痴）の表紙—明治二十五年十二月刊（昭和女子大学蔵）
櫻痴肖像—文久元年第一回洋行記念

目次

ロ 絵

第八卷の成立……………昭和女子大学 近代文学研究室…(三)

凡 例……………昭和女子大学 編 集 室…(一七)

イーストレーキ……………(一九)

D・マレー……………(七)

田 口 卯 吉……………(一九)

W・D・コックス……………(一七)

岸 田 吟 香……………(三七)

福 地 櫻 癡……………(三五)

黒 川 眞 頼……………(四三)

第八卷の成立

本巻は明治三十八年二月から三十九年八月に歿した左の七名の調査研究を収めた。

F・W・イーストレーキは、明治十四年横浜で齒科医を開業し、わが国に初めて泰西の齒科医術を伝えたアメリカ人W・C・イーストレーキの長男で、ベルリン大学で医学、理学、博言学、哲学等を専攻、特に東洋語に精通し、アッシリア語の辭書を著わし、二十三歳で博言博士の称号を授けられた。明治十七年（二十六歳）父のもとを訪ね日本に永住することになった。日本婦人と結婚し、この上もなく日本を愛した。福澤諭吉、島田三郎、植村正久等と親しく交わり、十九年一月磯邊彌一郎、高根義人らと週間英字新聞「東京インデペンデント」を創刊した。又二十四年十一月に同じく「トーキョウ・スベクター」をも出している。二十一年二月には磯邊等と神田錦町に国民英学会を創設、会話、書取、作文、訳読など実用英語に重点を置き、従来の英語教育に見られぬ新しい教授法を実施した。二十二年には「国民英学新誌」、「国民英学会英文誌」を刊行して生徒の学力養成をはかった。松居松葉、杉村楚人冠などはその教え子で、二葉亭四迷も彼について学んだといわれている。のち国民英学会を退いて日本英学院を創立した。講義よりは滑稽諧謔を交え教場からは笑いごえが絶えなかったという。二十九年名著「武勇の日本」を著わして、日清戦争に奮闘した日本軍人の忠誠を讃美し、内外に紹介したもので、これまで誤伝されていた歩兵第十二聯隊の木口小平の功を顕彰した。明治三十八

年二月十八日旅順開城の日に会心の笑みを含みつつ四十七歳で死歿した。ウェブスター氏新刊大辞書と訳字彙、英和袖珍新字彙、英和熟語慣用句辞典等多くのすぐれた字書がある。

D・マレーは招聘せられて明治六年来日、滞在六カ年、その間、日本の教育制度の創設に参画して大綱から細目に至るまで実地につき検討、立案、成文化して「学監考案日本教育法」を作りあげた。觀念に流れず日本の実情認識のもとに、むしろ日本当局のゆき過ぎをおさえるような態度で穩当な教育制度案を提出した。これが後日制定を見た教育令の原案となったのである。東京大学、女子師範、学士院等の設立に参与、殊に女子教育を重視した。日本の歴史を対象とした「日本物語」、「日本教育史略」等の著書がある。

田口卯吉は幕臣の出で、母町子は儒者佐藤一齋の孫である。幼いとき父を失った彼は、女丈夫の母によるきびしい躰けのもとに、後年文筆上の大事業を成す素地が養われたものと思われる。幕府に仕えた彼は維新前後は身辺多事で、各地に転々して辛苦をなめた。その間も英語、蘭語、医学を修めている。明治四年東京に落ちつき、尺振八の共立学舎で医学を、大蔵省翻譯局生徒として英語、経済を修め、紙幣寮に出仕して翻譯に従った。十年から十五年にかけて名著「日本開化小史」を完結したが、これは斬新な経済史観による日本文明史を記述したもので、史学界に革新の空氣を注入した。十一年退官、著述に専念することになった。十二年一月には彼が終生経済理論の本拠とした「東京経済雜誌」を創刊して、わが国の経済社会發展の方向を示し、政治、経済の特権化防止につとめた。彼は「日本開化小史」に見るように、わが国の史学に対する関心が深く、この情熱は更に古典文学方面にも拡大され、生来の多能多才と超人的能率主義を發揮して多くの貴重な書籍の編

纂、刊行となった。大日本人名辞典、日本社会事象、雑誌「史海」、正統群書類従復刊、国史大系編集等、学界に与えた便益は永久的なものがある。ほかにローマ字論、言文一致の提唱など、この方面でも当時の先覚者らしい見識をあらわしている。さらに彼は府會議員、代議士に選ばれ、株式取引所、鉄道会社、銀行等にも関係して、政治、実業方面でもその手腕を大きく買われた。死に至るまで無位無官、明治三十二年法学博士の学位が授与されている。

W・D・コックスはロンドン生まれで、明治九年招聘され、新設の駒場農学校英語教師として来日した。最初三カ年の契約であったが十二年大学予備門に転傭、十六年一月には帝国大学文科大学英语学科に出講、その後も或は神田共立学校、第一高等学校と、その三十八年七月死に至るまでわが国の英語教育のため尽瘁した。英作文、英文法、修辭学等の著書がある。その子供二人、ポール・コックスは東京商船学校、慶応義塾、日本中学校、攻玉社、八王子の府立第二商業学校、立川の府立第二中学校と終身教壇に立ち、次男のヘンリー・コックス（古楠顯理）は日本中学、早稲田大学、大倉高等商業学校に教鞭を執った。このように親子三人が日本の英学界のために貢献したのも珍しく、三人の勤続年数は合計九十年である。昭和三十二年十二月八日長男ポール・コックスが長年居住した土地の人々によって親子三人の慰霊碑が八王子郊外の御殿山に建てられた。

岸田吟香は岡山県の出身で、漢学を昌谷精溪、藤森天山に、語学を緒方洪庵、箕作秋坪にまなび、藤田東湖、大橋訥庵、西郷吉之助、桂小五郎等維新の傑物と親交あり、殊に安政の大地震には水戸邸で親しく東湖の圧死を目撃している。横浜でローマ字のヘボン博士から知遇を得、慶応三年協力して本邦最初の和英辞書「和英語

林集成」を上海で印刷発行し、明治三十三年頃まで版を重ね英語界に貢献した。更に彼独力の「和訳英語聯珠」を出して薩摩辞書に続いて愛用された。へボンから眼薬の調剤を学び、精錡水を製造販売して広く支那大陸にまで進出、各地に樂善堂藥舖分店を出し、延いては訓盲院（現東京盲学校）の創設という眼疾者への福音をもたらした。支那大陸では、出版、文化各般の事業を興し渡支日本人や本土人のため教育、開発に尽力し、東亜同文書院を創立した。新聞人としての彼は福地櫻癡とともに忘れられぬ功勞者で、元治二年という昔、濱田、本間などの同志と日本最古の邦字紙「海外新聞」を、ついで慶応四年米人ヴァンリードと「横浜新聞もしほ草」を発刊した。明治六年、日報社に入り東京日日紙上を名文で飾ったことは周知の通りで、新聞界の第一人者福地は彼の文章を見るたび卓を打って激賞した。彼は一語学者、一新聞人として終るには余りにも氣宇が壮大であった。経世済民の事業報國が真の念願で、廻漕、石炭発掘、氷室商社等いずれも着眼点が斬新で視野も広がった。まことに驚嘆すべき偉材で、その子に天才画家岸田劉生が出たことも偶然ではないのである。

福地櫻癡は長崎の儒医の子として、少青年時代すでに漢学、蘭学をまなび、十八歳江戸に出て大儒安積良齋に漢学を、森山、中濱両英学者に英語を学び、官に用いられて四度洋行、当時の人としては福澤に似た教養を身につけた。慶応四年四月「是そ余が持説を世上に試るの機關なる」との信念のもとに條野採菊等と「江湖新聞」を発刊、時の政府の過激をいましめるの文が忌諱に触れ発禁、ついで投獄されたが、明治七年末三十四歳のとき日報社社長兼主筆となって彼の縦横の記者活動が始まった。もはや江湖新聞の轍を踏むことなく、政府を推進して世界的文明國家の建設に協力し、輿論を指導して日本人の文化水準をたかめる社会の木鐸としての

使命に献身した。従来の三面雑報の娯楽新聞から一躍西欧諸国に見る政治、論説中心の高度の新聞紙たらしめ、記者の品性を高めて、爾来、今日の新聞の權威と識見を創始したのである。彼は文筆のみでなく政治經濟の實踐面でも大きい功績を残し、東京商法會議所副会頭、府會議長、株式取引所理事長等、すべて指導的地位にっている。末松謙澄等と演劇改良会の重要メンバーとして歌舞伎の封建性、座附作者の隷屬性を改革し、歌舞伎座建築、古脚本の修訂改作、新史劇、舞踊劇の創作、團十郎の活歴との提携等因襲的な歌舞伎劇をして新時代に即応する国劇たるの地位に引き上げたことは新聞人としての彼の功績に劣らぬものがある。鏡獅子、素襖落し、大森彦七、俠客春雨傘など今に大劇場で頻々上演されるゆえんである。不遇のうちに晩年をむかえ、諷刺小説にわずかに悶を晴らしたが、その生活態度の華美と江戸時代の通人、粹客の花柳趣味が、多少わざわざいしたことは成島柳北などと軌を一にするものがあり、過渡時代の文人の宿命であらうか。

黒川眞頼は群馬県の出身で、黒川春村に師事、後、養嗣子となって家学を継承した。明治二年大学小助教から、のち教授となり、十八年文学博士、また宮内省お歌所寄人となった。そのほか帝室博物館に関係深く、美術学校、音楽学校、国学院等の教授をつとめた。特に国語、国文学、美術、音楽、風俗、歌道に造詣深く、この方面の著述論説も多く、「語彙」、「古事類苑」、「国史要略」の編集があり、一方国語研究の伝統を維持して上田萬年の新国語学へと引き継いだ功績は忘れられない。「支那文字伝来考」、「歌語解説」、「日本文典大意」、「もこそ問答」等、その論考は多くの国語学者に恩恵を与えた。明治時代の総合的国語者として大成された大学者であって、分科的な時代には見られぬ豊富な知識の宝庫であつた。(昭和三十三年二月二十日
昭和女子大学近代文学研究室)